

知る・見る・考える
八幡市民の
交流紙

きずな

Vol.10

発行元：NPO法人22世紀
八幡ルネッサンス協会
八幡市八幡高畑 10-76
TEL・FAX 075-981-6505
発行：年4回

◆ 目次 ◆

八幡に生きる	… 1
老いて楽しむ	… 2
創作彫刻	… 3
宗教と社会	… 4・5
俳句歳時記	… 6
八幡の芸能	… 7
郷土の川木津川を知ろう	… 8・9
「更科日記」を読む	… 10
文学で迎える八幡の歴史	… 11・12
編集後記	… 12

八幡に 活きる

人間の尊厳を目指して

— 男山コスモス開設十余年

井上一枝



今から30年前の1989年、京都の朝日シネマで、羽田澄子さんのドキュメンタリー映画『安心して老いるために』を観ました。介護福祉の道に進むきっかけになった作品です。

それまで、「日本に高齢社会がやってくる。それに備えなければ」と叫ばれていました。しかし、福祉先進国と言われるオランダやスウェーデンなどと比べて遅れた現実がありました。例えば、

「敬老の日」に贈り物を受けて有り難がる傾向があります。しかし、施しを受けることが福祉ではない。福祉とは、人間の尊厳を守り発展させること。そんな理念を肌で感じ、実践したいと思ったのです。

オランダやスウェーデン等の国は、福祉を国家施策として取り組み、政治体制として定着しています。どうしたらそれに近づけるのか。

私は、高等学校の教師をしていた時期がありますが、その後自宅で学習塾を開くようになりました。それを止め、先ずホームヘルパー（訪問介護員）になりました。そこで、高齢者が置かれている実態を知ることから始めたのです。

高齢者（我々も含めて）も格差社会に生きています。格差の現実の中で、人間の尊厳が奪われるという現実遭遇しているのです。

1998年に転機を迎えます。京都市主催「女塾起業セミナー」が行われ、それに参加したのです。バブルがはじけた時期で、既成の觀念にとらわれず、地

域に密着したソーシャルビジネス等での起業を目指す女性を対象に、それぞれの夢を実現する講座が開かれたのです。私はWBジャパン（女性のための世界銀行）の片岡勝氏の講演を聞き、これからの社会は、女性が世の中を変え、今までにない発想や視点で社会的な事業を進める意義と可能性に目を開かされたのです。

やがて、2000年に介護保険法が成立します。ケアマネジャー（介護支援専門員）の資格を取得した私は、地域に介護施設の開設を目指しました。

読書会などで知遇を得た方々にも協力を仰ぎ、男山笹谷の団地の商業施設の一角を借り受けました。国からの補助もあり、事業に理解を示す銀行から低利な資金も受けることができました。

介護の施設なのですから、デイサービスができる環境が必要です。テーブルや椅子、ベッドはもちろん、エアコン、床暖房、入浴施設、体操や文化活動ができるスペース、厨房や宿泊のできる施設も確保しました。

現在、20数名の高齢者の登録があり、デイサービスを中心に、訪問、ショートステイを提供しています。

本体事業のほか、自事業として①予防教室「コスモスわくわく教室」②相談事業「コスモスオレンジカフェ」③ミニ図書館「コスモス文庫」④軽食・喫茶「コスモス103」⑤「コミュニティスペースひだまり」を運営しています。

現在、常勤8名の他、非常勤として介護、送迎、調理、事務の方19名のスタッフで運営しています。

介護の仕事を進めるうえで大切なことは、相手の人格を認め、いかに向き合うかということです。例えば、認知症高齢者の方と対する際、その現象面を見るだけでなく、その方が歩んでこられた人生や、人となりに思いをおこすことが大切だと思います。

単に、介護の分野に精通するだけが優秀なヘルパーではない、とも思います。深い人間観察と社会に対する見方や考え方を深めることが決定的に重要なのだと思う今日このごろです。

特集「福祉を考える」として、巻頭に、NPO法人・介護の家コスモス男山の理事長に、介護施設を立ち上げた動機や抱負などをお尋ねしました。このページでは、介護される側の立場として佐藤和子さん（当年94歳）に登場していただき、お話を伺うことにしました。



老いて楽しく

です。すでに社会人となり、北海道のパルプ会社に勤務されているとのこと。はるばる青函連絡船や国鉄の列車を乗り継いで大阪までやってきたのです。

当初は、そんなつもりはなかったのですが、実の母から、良い人だから一緒にいなさいと勧められ（父は早くに亡くなっていた）、私自身不安な面はありましたが、当時は樺太にも自由に往来できた時で、樺太にも行ってみたいと妙な冒険心もあり、結婚を承諾したのです。

見ず知らずの北海道の旭川市に、夫の勤務先であるパルプ会社の社宅に新居を設けました。そして、2人の女の子が誕生します。

32歳の頃だったと思いますが、夫の転勤があり、東京の三鷹市に転居することになります。専業主婦として、夫の同僚や上司の方が自宅を訪れた際に接待したことを覚えています。

やがて、2人の娘が成長します。姉はおとなしく目立つことはなかつ

たのですが、妹のほうは、向こう見ずでお転婆。世話がかかりました。写真が好きで、報道カメラマンを目指していたらしいのですが、夫も私も派手な行動を抑え気味でした。彼女はやがて、国会議員の野末陳平の第二秘書を勤めることになります。第一秘書が現在の立憲民主党の国会議員の海江田万里で、不思議な縁を感じます。やがて、近所のスーパーマーケットの一角で、写真現像の仕事をする事になり、私も手伝うようになりました。

東京では、友達も増え、水泳や、登山、俳句、墨絵など趣味の世界に楽しんだものです。また、孫の面倒もよくみました。娘や孫たちとハワイ旅行を楽しんだこともあります。

年月が移り、年下の娘のほうが五十歳で亡くなり、夫が九十歳で亡くなります。また、仲良くおしゃべりしていた友が一人また一人と亡くなり、東京にたった一人で暮らすことになったのです。

気分的に落ち込みましたが、それ以上に、老人がひとり暮らしに不安に襲われるようになりました。

娘夫婦が心配し、何度も東京を訪れては、八幡に暮らすことを勧められました。

ただし、娘夫婦と同居することは考えず、八幡市内で娘たちとも行き来が簡単にできる高齢者住宅を探してもらうようにしました。

現在の施設がそれです。

居室は八畳強の洋室でトイレ付きです。窓からの見晴らしもよく快適です。

幸いにも目前に松花堂庭園があり、たまに『吉兆』に出かけてお茶をします。美しい庭園を眺めながら一杯のコーヒ―は、まさに至福のひとつです。

土曜日の朝は、松花堂公園の野菜市に出かけ、買い物や少しと、ちょっとした会話を楽しんできます。

読書が好きで、『文芸春秋』が発売されれば決まって買って来てもらって読んでいる毎日です。

【インタビューを終えて】

大阪生まれの佐藤和子さんは、私が尋ねることにはきはきと受け答えをして下さり、こちらが戸惑うことはありませんでした。気高く聡明な人だと思えます。そして、その豊かな人生をやがて終えようとされていることに思いをいたし、その尊厳を見守ってゆきたいと思いました。（D）

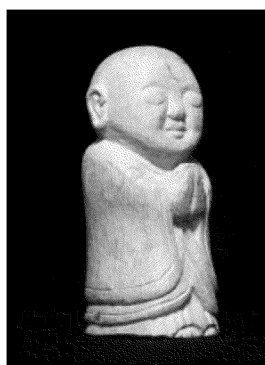
創作彫刻

最終回

― 仏教の教えを彫刻に

加藤錠治

難転地藏



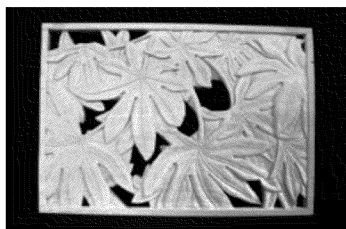
法華経では七種の災難を火難、水難、羅刹難、王難、鬼難、枷鎖難、怨賊難とまとめている。このような様々の災いを吉に転じる願いを込めて、ナンテン（南天）の木で可愛らしいお地藏菩薩を彫ってみた。

この他にも災難には七難九厄とか七難八苦とかが知られているが、難転地藏は難を転じて頂けると期待した作品である。これらの難を照らして難を避けるために白毫にはダイヤモンドを入れた。

三竦み

これは仏教とはかけ離れるが、三竦（すく）みは、現実と理想に感情を加えた三言論として知られている。人は愛を求め、愛は道徳を生み出し、道徳は人を成長させる。その逆は、道徳が愛を育て、愛が人を育み、人は更に道徳を築き上げる。

三竦みの代表例はジャンケンで、ヘビ↓カエル↓ナメクジ↓ヘビ↓・・・は、ヘビ（蛇）はカエル（蛙）を食べる、カエルはナメクジ（蛞蝓）を食べる、ナメクジはヘビの毒が効かなくて、ナメクジの粘液でヘビを溶かすとい



う、三竦みで江戸時代に流行したようである。三者は虫でないのに漢字で書くとは虫偏である点でも興味あって、偶然とは思えない。

勝敗は常にあること、三つ巴につながる尊い教訓である。

楓の語源は奈良時代にさかのぼり、楓を「かえるて」と言っていた。これは蛙の手に似ているからのようである。そこで蛙の出てくる三竦みには楓の葉が最適と考えた。

表面と裏面の絵柄を変えて彫ったもので欄間の小型の様な作品である。

井の中の蛙



孫悟空が自慢の足で雲に乗って遠くに走り、そこで見つけた柱に自分の名前を書いて得意になっていた。しかし、それは釈迦の指に書いた名前だったと言う話。これ

は「所詮、威張ってみても、やっていることは些細なこと」という意味で、井の中の蛙ということになる。この話に因んで、お釈迦様の手の平の上に孫悟空を彫ったものである。さらに腕釧を彫りだして自由に動く遊環にした。この環は取りだすことができないことから、「落ちない」「取れない」「外れない」の三不性を表している。合格・的中・盗難のお守りになるのではと考えて彫った作品でもある。

☆おわりに☆

仏像彫刻を始めて三十年以上になるが、創作彫刻の他に仏像は勿論のこと、動物・装飾品・扁額・印鑑から楽器まで、その間に製作した作品は百点を超える。これらの作品はホームページ『仏像の囁き』に掲載しているので、開くと作品の詳しい写真を見ることができ

る。心静かに仏像の囁きに耳を傾けながら、これからもおもしろい、なるほどと言われる創作彫刻を刻み続けたいと思っている。

宗教と社会 ⑦

浄泉寺住職 大原 光夫

イスラム国（IS）とは何か

今回は、最も危険で世界の注目度の高いイスラム国（IS）の話に入ります。ここで注意しなければならぬことは、曖昧な根拠や人づての話、センセーショナルな表現に目を奪われないことです。断片的で切れ味のいい話にはついい心が引かれます。さらに、他をこきおろす、「何々は間違いだ」「何々を断罪する!」と大上段に主張することと論者の値打ちを上げようとする表現にも注意しなければなりません。小気味よい表現に、ついその気になってしまふからです。なによりも大切なことは、膨大な情報量の時代に取捨選択能力を持つこと、それがとても大事になつていふと考えます（何事も鵜呑みは危険）。

今回は、日本経済新聞の記者、岐部秀光・押野真也の両氏（当時、カイロ支局駐在）・久門武史氏（ドバイ支局駐在）の三氏の報告をもとに話を進めます。報告のすべてが、私の考えと同じわけではないのですが、私なりのISについての解説を補ってくれる貴重

な報告だと考えます。

さて、本題に入りましょう。皆さんに馴染みのある言葉は、「中東」そして「中近東」です。このエリアはどこを指すのでしょうか。答えは「アラビア語を話す、アラブ諸国」です。しかし、一般的には中東のエリアをその時々で拡大・縮小しているのが現状です。場合によってはアフリカのエチオピアも中東に含まれることもあるようです。何故そうなるのか。それは欧州から見ても「極東」・「中東」・「中近東」という視点だからなのです。私のよく訪問するモンゴルでも、内モンゴル、外モンゴルという表現を耳にされた方がおられると思います。私は外モンゴルを訪問するわけですが、彼等は自分達の国を外モンゴルとは言いません。「モンゴル共和国」と言います。「外モンゴル」という表現は、中国政権から見ると「外」のモンゴルなのです。

中東や中近東はヨーロッパ諸国の感覚でエリアが決まる。これが正解です。先程、「答えは、アラブ諸国です」と言いましたが、これはあくまで原則的にはという意味で理解する必要があります。そこで、この中東の混乱の始まりとISが謳う「大義名分」が見事に一致しているのです。

それでは、「中東の混乱」とはどの

ようなものであったのでしょうか。

第1次世界大戦（1914～1918年）まではオスマン帝国が広大な地域を支配していました。この第1次世界大戦に破れたオスマン帝国は事実上、解体の憂き目にあいます（一昨年もトルコでオスマン帝国を調査）。この機を逃さず、イギリス・フランス・ロシアが密約を結び、アラブ地域の分割を取り決めるのです。これを、「サイクス・ピコ協定」と言います。そして、この3国は豊富な石油資源を取り込むわけです。その後、第2次世界大戦でイギリスはドイツのナチス帝国に辛うじて勝利するのですが、このことでイギリスの国力は急速に低下します。そこにアメリカがイギリスにかわつてこの地域の盟主となります。

米・ソの冷戦時代も地球を二つに分けた争いでしたが、産油国地域は両国によつてここだけは対立を避け、共有された地域になりました。イスラム国（IS）は、100年続いた「サイクス・ピコ協定による国境を破壊した」と宣言して、イラクとシリアの国境にある土塁をブルドーザーで破壊しました。イスラム国（IS）の言い分は、密約による百年の屈辱を一気に取り戻す大義名分となります。同時に彼らは、石油資源を取り込むことに成功します。

どうやら、オスマン帝国の崩壊を機に、イギリス・アメリカ・イスラム国（IS）と石油資源をめぐる利権のようなものが深部に横たわっているように見えます。こうなりますと、これは宗教上の争いの問題なのか、石油利権（経済）の問題なのか、もう少し検討しなければならぬこととなります。

当初、イスラム教という宗教はジハード（聖戦）に始まり、「戦争」に直結して、殺人に至る。「イスラム教は平気で戦争をする。およそ宗教とは言い難い!」という世論が日本でのイスラム教認識となつていきます。その延長線上でISを見ていきますと、宗教上の対立軸しか見えなくなり、深部にある歴史的な100年以上にわたる石油利権問題は闇に葬られ、さらに「テロ」という帽子がかぶせられますと、「イスラム教IIテロ」は許せない、と世間の意識ははこぞつて、そこになだれ込んでいきます。日本でのイスラム教報道の歪みは、イスラム国（IS）報道にも及んでいふと考えられます。



IS（イスラム国）はどのような生まれ たか

IS（イスラム国）は、ウサマ・ビンラディンで有名になったアルカイダから誕生しました。アルカイダ系組織の一部が袂を分かち、ISが生まれました。いずれも、イスラム教スンニ派を中心に組織され、欧米に対する敵意は両者とも共通しています。

先に紹介しました通り、近代における中東の混乱はオスマン帝国の崩壊にともない、イギリス・フランス・ロシアの密約「サイクス・ピコ協定」に大きな原因があると考えてよいでしょう。そして、米・ソの冷戦の最中に、中東だけは「共有されていた」のですが、この共有の最中に「イラン革命」というものが起こります。これは、当時のイランのモサデク首相が石油の国有化を宣言したことに、石油利権の危機として、アメリカが対抗し、イラン軍部を支援してパーレビ国王をたてて、クーデターを起こさせました。アメリカの後ろ盾で権力を手にしたパーレビ国王は、いわゆる「白色革命」を実行しました。それは、急激な近代化・西欧化を強引に進めるもので、貧富の格差が深刻になりました。パーレビ国王は、これに反対するホメイニ氏らも弾圧しました。このことに米国が介入

し、国民の生活が困窮したことで、イラン国民の怒りが爆発。パーレビ国王はエジプトに亡命することになりました。それにかわり、パリに亡命していたホメイニ氏が帰国。そして「イスラム共和国」の樹立を宣言するのです。これを、イラン革命と呼んでいます。このイラン革命の波及を危惧したソ連は、アフガニスタンを侵攻します。そして、イスラム勢力に徹底的な弾圧を加え鎮圧を試みたのです。このソ連の暴挙に対して多くのイスラム諸国から義勇軍が対抗するために集結。ゲリラ戦を展開します。この舞台が映画「ランボー3・怒りのアフガン」（元米特殊部隊隊員のランボーがイスラム義勇軍を支援する内容）となつて紹介されたことは皆さんもよくご存知のことと思います。これがアルカイダ誕生の背景です。

つまり、アルカイダの産みの親は、ソ連に対抗したアメリカであつたわけですが、しかも、中東をめぐる石油利権が根底にあります。そして、アメリカが後押ししたアルカイダは、やがてウサマ・ビンラディンを生み出すこととなります。そして、アメリカはウサマ・ビンラディンを殺害します。要するに、イスラム義勇軍がイスラム過激派となり、テロを世界中で実行するようにな

ります。大国に翻弄されたアラブ人は、根底にアラブ・ナショナリズムを蓄積してゆきます。

「IS」や「アルカイダ」の「テロ撲滅」を世界世論で強調して包囲しても、歯がゆいほど進展が見られないのは、このような歴史的背景があるからです。ましてや、イスラム教という宗教が戦争・殺人を常とする「あるまじき宗教」と理解していきまると、大きな誤解の中で社会を見てしまうことになりました。

それでは、ISとアルカイダの違いと共通点はどこにあるのでしょうか。共通点は、①アラブ・ナショナリズム ②欧米に対する敵意 ③テロという手法 ④コーランを駆使してカルト（狂信）のマインド・コントロールの手法を採用、の4点です。

世界中の、まじめに信仰するムスリムは両者をイスラム教とは考えていません。2015年3月上旬にインドネシアを訪問して、ジャカルタのイスラム寺院で交流しました。インドネシアは150年前にイスラム教が伝わり、今では国民の80%以上がイスラム教徒です。やはり、ISの話題が出ました。イスラムの坊さんも、集まったムスリムたちも、興奮気味に「ISがイスラムの教えに基づいて行動しているとは

考えられない」「あれはイスラム教ではない」と断言していたのが印象的でした。

ISとアルカイダの違いはなにか。ISは国際テロ組織アルカイダから派生し、勢力を拡大。そして、油田を確保して安定した収入源（国土）を得たことが最大の特徴と言えます。「サイクス・ピコ協定」の百年の屈辱の打破という大義名分の標榜です。これが、世界にテロを輸出する力となっています。2つ目の違いは、残虐性とその映像を世界に発信し、他の同類のテロ組織を先導する手法を取っていることです。3つ目の違いは、ISの国家的体制が整備され、支配地域で課税が行われていることです。

アルカイダが富豪からの寄付や関連企業の収益、さらに「身代金」などで活動財源を得ていることと比べると、はるかに安定しているのです。

以上、見てきましたように、IS・アルカイダはともに同じ根を持ち対立もしていますが、同じ土壌の上でテロに狂奔していることに違いはありません。そして、いずれもイスラム教の教えとは異質のものであり、宗教ではなく、権力と利権の世界で語らねば説明できないものと言わざるを得ません。

八幡俳句歳時記 6

近くにいた俳人たち(1)

— 香里園 西東三鬼

小笠原信

今回から、八幡市の比較的近い所に、一時的にせよ住んで活躍していた俳人と、その俳句について書いてみます。

〈水枕 ガバリと寒い 海がある〉

この句は皆さんもどこかで聞かれたことがあるかと思います。西東三鬼(俳号)の代表句の一つです。昭和8年(1939)に33歳で俳句を初めてわずか三年。ホームランですね。

三鬼さんは、昭和23年から31年までの8年間、京阪線、香里園の関西医科大学(当時は大阪女子医大) 香里病院の歯科部長として、香里園の山手に住んでいました。——13年程遅れて大阪に就職したぼくは、偶然にも香里園の寮に住んでいて、香里園の駅から病院を見上げ、あそこに三鬼さんが居たんだと思っただけでした。

この時期は、山口誓子中心の俳句結社「天狼」の屋台骨として、歯科医と

して、最も充実していたと思われる。ご存知のように、三鬼さん(本名齋藤敬直)は、明治33年(1900)に岡山県中央部の津山市の町中で生まれています。役人の子の三男で、長兄は20才も年上でした。6才で父が病死し、18才の時から津山を離れ、東京の長兄の扶養で日本歯科医専に学んでいます。

卒業後は、長兄の勤務地のシンガポールに行き、歯科医を開業。昭和3年に帰国し、東京の大森で開業。昭和13年には一旦歯科医科をやめ、商売人になったりと、転変波乱の人生だったようです。

その津山市に、ぼくが勤めていた会社の大きな工場があり、毎月出張していました。幼年期、少年期の三鬼さんが上った見事な石垣と桜の津山城は、ぼくの好きな場所です。

ちなみに、城下町のあちこちに投句箱もあり、市では彼を顕彰して「西東三鬼賞」を設けています。

さて、最初の〈水枕〉の代表句に戻りましょう。

この句の景(場面・景色)は、季語的に言えば〈寒い海〉、冬の海ですね。眼前には、大きな景として冬の海がある。一方、近くの景として、水枕がある。というよりも作者の熱のある頭の下に

は、頭を冷やすための朱色のゴム製の水枕がある。水枕は、病弱だった三鬼少年にとつて親しいもの。いわば愛用品。今、水枕の中には〈氷〉が入っている。その氷は、水枕の中の海に漂うまさに〈氷山〉。小さな氷片を大きな氷山に〈見たてた〉時、36才の三鬼さんは「できた!」と叫んだことでしょう。

この句の大成功は、副詞〈ガバリ〉にあります。ガバリが冬の寒々しくかつ荒々しい海を想起させ、また、ゴツゴツとした物質感のある氷山を呼び寄せますね。——(小さな白状をすれば、ぼくは10年前までは、季語は「水枕」と勘違いしていました。恥ずかしながら)

なお、この名句は三鬼さん自身の何度もの体験と見立てと、ガバリという言葉のキャッチの3点セットで瞬間的にできた句と思います。

関連して、〈水枕〉の句で好きな句があります。

戦後の俳壇を力強く牽引した山口誓子の〈水枕 中を寒栢 うち通る〉です。この句にも超近景として、水枕の中に響いている「火の用心!」の拍子木の硬く高い音があります。この秀句の結実までに、長い間、誓子さんの頭の底で微動していたのが、朋友三鬼さ

んの〈ガバリ〉の句だと思っています。別の言い方をすれば、相手の句へのオマージュ(讃歌、あるいは「どっだ!」という対抗、更に恩返し(返句)のようなペアな句だと気付きました——この二句の関係については先行の論者があ

るかも。

〈水枕〉の句を筆頭に、ぼくの愛する三鬼さんには沢山の名句があります(次号で詳しく)。

〈おそろるべき 君等の乳房 夏来る〉
〈中年や 遠くみのれる 夜の桃〉
〈暗く暑く 大群衆と 花火待つ〉
〈秋の暮 大魚の骨を 海が引く〉等々実に中広く自在な視界。まさに鬼才、自由自在な言葉の天才。

三鬼さんの出現の大本とは、小京都・津山という地方都市に生れ、病弱で思うように学校に行けず、本を読んだり一人遊びしたりの自由自在な気質の形成にあると感じています。

昭和23年に、香里園近辺で(島根県の山の中ではなく)生れて、幼年時に虫歯になつていたら、香里病院のダンディな齋藤三鬼先生に会えたのに、残念です。

なお、三鬼さんの全句は文庫本『西東三鬼全句集』(角川ソフィア文庫)で手軽に読めます。皆さんも読んで、おもしろい句を教えてください。

八幡の芸能



石清水八幡宮

ゆかりの謡曲

猪飼 康夫

謡曲は、能楽の台詞や節付けされた語りで、演劇における脚本に相当します。

能楽は、600年ほど昔室町時代に観阿弥・世阿弥親子によって大成された、世界で最も古い舞台芸能と言われております。

謡・囃子・舞によって構成され、能装束を纏った能役者により能舞台上で演じられ、二百番余りの演目の中に石清水八幡宮に因んだ曲が二番「弓八幡」と「放生川」とがあります。「弓八幡」の筋書は、次のようになっています。

後宇多天皇から男山八幡宮二月初卯の御神事に参詣せよとの宣旨を受けた臣下が、男山の麓へとやって参ります。多くの参詣人の中に、錦の袋に入れた弓を担いだ老翁と出会います。

「何処から参詣に来られたのですか」と訊ねると、「私は永年八幡宮に

仕えている者です。桑の弓を後宇多天皇に献げるため、貴方が来るのを待っていました。弓は袋に納め戦わずして天下を治めるようにとの神の思召しです」と言つて弓を渡ししました。

老翁は三韓征伐の事や八幡宮の由来などを語ったあと、「私は、八幡宮の神託を伝える為に現れた高良の神です」と言つて消失しました。臣下が参拝を済まし帰ろうとすると、何処からともなく美しい音楽が聞こえ、霊香が漂い、高良の神が姿を現します。そして、御代を祝い石清水八幡宮の神徳を讃える舞台を舞います。



→老翁が弓を納めた錦の袋を掲げ、橋掛かりから現れる

世界の歴史は、戦いの歴史といつても過言ではありません。

能楽には、修羅物といわれる戦もので、「敦盛」「忠度」「経正」「清経」など、平家物語を主題にした演目が幾つかあります。物語の共通点は、この世で戦いを起こした者は、あの

世で修羅道に落ちて成仏できず、戦いの明け暮れに苦しみ、亡霊となつてこの世に救いを求めにやってくるの筋書きになっています。

戦いは、人類の性であり悪業でもあります。武器を永久に封印し、ルールやマナーを基本にしたスポーツやゲームの世界のみで力を競いたいものです。

また、「放生川」の筋書きは、次のようなものです。

都の寺社を巡拝した鹿島の神職筑波何某が、南祭の日男山八幡宮へやってくる、生きた魚を入れた水桶を持った老翁に出会います。

「なぜ、ご神事の日に殺生をするのですか」と問うと、老翁は「本日のご神事は放生会で、この魚を放生川に放つのです」と答え、放生会の由来を語り、魚を川に放します。そして「私は、当社のご神徳を享けた武内の神です」と名のり、鳩の杖に縋つて山上へ立ち去ります。

やがて月が上り、神楽の音と共に武内の神が現れ、平和の御代を讃える舞を舞います。

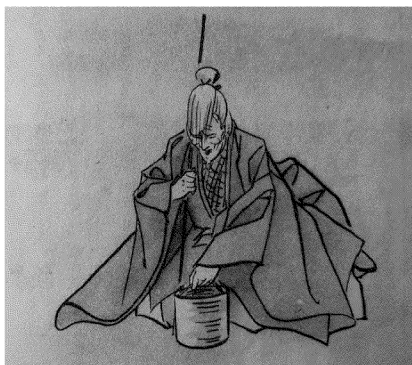
石清水八幡宮が創建されて間もなく、宇佐八幡宮の放生会に倣った放生行事が始まりました。明治初期の神仏分離令で一旦は中断しましたが、

今は秋の石清水祭で、放生川に架かる安居橋（太鼓橋）一帯で放生行事が行われています。

橋の上から鳩が放たれ、蝶のような羽を背につけた童子達が雅楽にあわせて「胡蝶の舞」を舞います。川岸の特設壇上からは、大勢の参列者によって次々と鯉や鮒などが川に放たれます。

放生川へと続く大谷川が雑草やごみで大変汚れていた時期がありましたが、22世紀ルネッサンス運動のボランティアの清掃活動により綺麗に蘇り、今では放生行事の良き支えになっていると思います。

※挿絵は観世流の謡本より



→老翁が水桶を持って現れる。水桶には放生川へ放つ魚が入っている



郷土の川、 木津川を知ろう！

佐藤 長作

昨年の11月12日、22世紀八幡ルネッサンス協会主催の第10回八幡市民文化サロンは、「郷土の川、木津川を知ろう！」のテーマで開催されました。講師は、河川レンジャーアドバイザーの山田信人さんと福井波恵さんです。山田さんは、水質調査を中心に活動。福井さんは川について子どもたちに教えたり、水制（竹蛇籠、中聖牛設置）などを中心に活動したりしています。お二人の講演をもとに、資料を補って紹介し、感想をまとめてみました。

木津川とはどんな川か

木津川の概要について、国土交通省のホームページには次のように紹介されています。

「淀川の支川である木津川はその源を三重、奈良の県境を南北に走る布引山脈に発し、笠置、加茂を経て山城盆地を貫流し、京都府・大阪府境

付近で宇治川、桂川と共に淀川へと合流する流域面積1596平方キロ、幹川流路延長99キロの一級河川です。木津川の本流は、布引山脈に源を発し、山間を曲流して上野盆地に出て、鈴鹿、布引山脈に源を発する柘植川、服部川を合流して岩倉峠を西流し、大河原で名張川を合わせ、笠置、加茂を経て山城盆地を貫流し、京都府、大阪府境付近で淀川に合流する。木津川は、三重県中北部、奈良県東部、京都府南東部の3県にまたがっています。」

その源は、三重県津市の西側の山塊。東は伊勢湾です。改めて流路の長さに驚きます。

河床低下の問題

福井さんの講演は、木津川が災害を引き起こす状況にあることを提示されました。特に京田辺付近の木津川は、川の流路が固定され、河床の低下を招き、流路が湾曲し堤防を侵食し、災害につながることです。そのプロセスは、「上流からの砂の供給が減少↓砂州が固定される↓流路が固定される↓河床が削られる↓流路が加速し更に河床が削られる↓蛇行が促進される」というものです。蛇行が堤防に作用したら決壊とな

ります。福井さんは堤防の崩落を実測し、国土交通省に現状を訴え改善させた経験を報告されました。しかし、今後もその繰り返しをしないかなければならないのではないかと訴えています。

河床低下の現状は危機迫るものがあります。近鉄電車の橋梁の土台部分には、河床低下によって危機的状況にあるのではないのでしょうか。橋脚の土台部分がむき出しになっています。数メートルは河床が低下しています。土木工学の到達点では乗り越えられるかもしれませんが、河床低下に対しての対策が必要です。

八幡市周辺の木津川はどうか

八幡市御幸橋周辺の木津川の状況はどうでしょうか。グーグルの提供する航空写真では、砂州は緑に覆われています。このことで河床低下が進んでいることが読み取れます。流路が固定されている証なのです。河床低下については宇治川、伏見区の中書島三栖閘門付近でも見られます。江戸時代高瀬舟が京都と大阪の間を行き来していたことは時代小説に出ています。でも今は宇治川との間にかなりの落差が生じています。

宇治市の下流の宇治川には砂州が

見られません。天ヶ瀬ダムが砂を堰き止めているからでしょう。ダムの下流には砂の供給はありません。そのことも影響しているようです。

河床低下には直接関係はありませんが、中書島の「三栖閘門資料館」は一度訪れてみる価値がある場所でお勧めです。

生態系への影響

河床低下は生態系にも影響をあたえています。穏やかな水の流れがなくなり、水生植物が減少し、魚の産卵にも影響します。

そこで、竹蛇籠で、河床低下がもたらすワンドの消失を復活しようと取り組んでいます。竹蛇籠を流路の水際付近に設置し、流路の流速を大きくして瀬を作るとともに、竹蛇籠の下流の流速を小さくし、多様な流れ場を作ることによって生物の生息環境に適した物となります。また聖牛（写真参照）と言われる構造物で流れを制御する試みもされています。三角錐に木を組み合わせた形状で、そ



の形が牛の角に似ていることから名付けられたと言われています。聖牛は、その大きさにより、大聖牛、中聖牛と名づけられています。聖牛を配置し、流れの勢いを弱めたり、流れを変えたりと制御します。

プラスチックごみの問題

山田さんは、木津高校で化学クラブの顧問として木津川の水質調査を指導されていました。長い期間指導され、今でも水質調査に関わっています。

山田さんの講演で特に印象に残ったことは、マイクロプラスチックのことです。プラスチックごみの現状については、地球がごみに覆われていることと、生物の生態系に深刻な問題を引き起こしていることだと思います。鳥がプラスチック片を捕食し、体内に留まりやがて死に至る。その衝撃的な写真が公開されています。



さらにマイクロプラスチックの現

状です。5ミリ以下のプラスチックと定義されていますが、プラスチックが川の流れの中で微細な粒になり海洋に流れ込みます。マイクロプラスチックは、海洋で有害物質を吸着する性質があります。それを魚類が捕食することで体内に蓄積。そして人間が食べる。当然、健康に対して影響が出ることでしょう。

海洋汚染だけではなく、大気汚染についても報告があります。北極圏とアルプス山脈に積もった雪の中からマイクロプラスチック(プラスチック微粒子)が検出されています。マイクロプラスチックの微粒子が大気圏に拡散していることの証明といえます。東京湾でもマイクロプラスチックが検出されています。2016年4月、東京農工大学の報告では、カタチイワシ64匹中49匹の消化管から150個のマイクロプラスチックが検出され、0.1〜1.0ミリの粒子が8割を占めていました。

今回の講演で感じたことは、草の根的な地道な活動で現状を明らかにして、対策を考え試してみる姿勢の重要性です。不明点も多数あり、わかっていないことだらけだとの認識を持つべきだと思います。

例えば、砂州を削れば下流域では

どうなるのかは、予測はできても実際はどう変化するか断定できない。そのため、川の流れに影響する工事には国土交通省の職員も消極的な姿勢を示されるそうです。

木津川クリーン大作戦にご参加を

淀川水系一斉美化アクション「第4回木津川流域クリーン大作戦」は、2020年2月16日(日)に実施されます。みなさんの参加を訴えます。

淀川水系一斉美化アクションとは淀川水系(木津川・宇治川・桂川・淀川)の7つのエリアで連携して実施する清掃活動です。八幡市では「流れ橋左岸」の河川敷の清掃を行います。私も昨年の清掃活動に参加させてもらいました。木津川の100キロの一部の流橋左岸でしたが、非常に多くのペットボトル、プラスチックごみが散乱していました。時間内ではとても回収できませんでした。

参加することで現状を知っていただけだと思います。ごみは、「意図的に捨てられたもの」ばかりではありません。屋外に置いてあったものが風に煽られたり、雨などで流されたりして川に行きつく物もあります。

ポイ捨てのマナー改善だけでは、ごみは減らないのではないでしょう

か。ごみの流失を防ぐ対策も必要だと思います。



(写真は昨年の木津川クリーン大作戦の記念撮影＝流れ橋地区)

「更級日記」

(萩の葉の段) を読む

絵と文 辻井 富久子

私がこの日記に出会ったのは中学生の時、学校で寿岳章子先生の講演があつて、平安時代の女流文学の話がされた時であつたように記憶しています。

作者は菅原孝標の女。父、孝標は菅原道真の子孫であり、代々大学頭や文章博士を勤めた家系でありながら、その人生を地方受領で終えています。

寛弘五年（藤原道長の全盛時代）に作者は京に生まれ、その幼時を上総（千葉）に過ごし、京への憧れをつのらせてゆく日々の様子が記されています。

彼女が、父の任地上総より京に帰つての少女期、姉とある夜の話です。
治安二年（1022）陰暦七月十三日

——その十三日の夜月いみじく隈なくあかきに皆人も寝たる夜中ばかりに縁に出でゐて……
姉と月あかりの縁で話をしています。

す。

そうこうしていると隣の家に車が停まり、「萩の葉 萩の葉」と呼ぶ声が聞こえてきます。

返事はない様子です。

呼びあぐねて男は趣ある風で笛を吹いてゆき過ぎてしまいます。

作者が、

笛のねのただ秋風と聞こゆるに

など萩の葉のそよと答へぬ

（萩の葉を呼んでいるのにどうして応えてあげないのでしょうか）

姉は

萩の葉の答ふるまでも吹きよらで

ただに過ぎぬる笛の音を憂き

（萩の葉が呼びかけに答えるまでも笛を吹かないでゆき過ぎてしまう笛の主の心のないことです）

こんなふうになつて夜明けまで姉ともの思いしながら、景色を見て過ごします。

月の夜の姉妹の語らいの場面が印象的で心にのこっていました。

作者がこのとき十五歳であれば女性としての、さほど深い悲哀とかは経験もなかったであろうと思われる、姉なる人は結婚もして、大人の

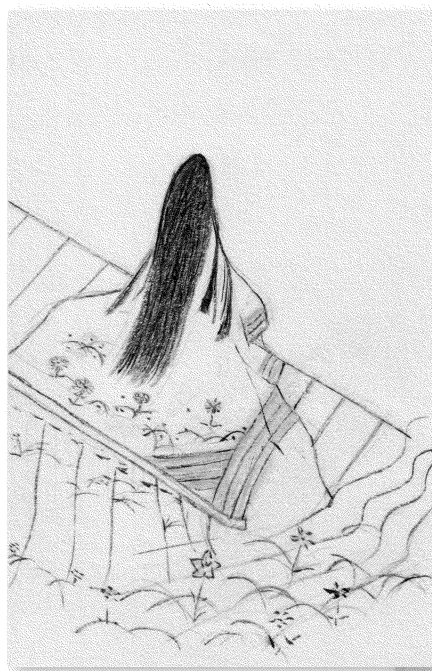
女性としての恋愛観などもその歌にみてとれます。

この翌々年に姉は出産で亡くなり、多感な作者も厳しい現実に向面することになります。

日記は華やかな時代でありながら、全体にどこかはかなさがつきまといまします。

この世も人もあやうくはかないのは今も同じ。些細な日常や会話が一生につながる心象風景として深く心に刻まれるものとなることもありまします。それがつかの間のことであつても。

十三日の夜の情景は、まるで一幅の絵をみるようにあざやかで美しく匂い立つてきます。



文学でたどる

八幡の歴史 6

吉井勇と八幡 その1

土井三郎

歌人吉井勇とその夫人が宝青庵を寓居としていたのは、戦後まもなくの頃のことです。

山城の八幡の庄の月夜田の

里居わびしく妹の瘦せたる

勇の歌集「残夢」の冒頭に、勇自身が当時の境遇について自ら語っている文章があります。

「昭和二十年十月、越中の國八尾町の流寓を去つて、京に近き山城の國八幡の里に居を移しぬ。ここは無住の僧院にして、境内楓樹極めて多く、閑庭苔深くして寸餘に及べり。隠逸以て世の推移を見むとす。」

今から十年近く昔、八幡在住の頃の吉井勇のことを伺いに宝青庵を訪ねました。若葉の頃で、庭には楓の木に交じって枝葉を大きく伸ばす樹木がありました。榎櫨という樹木だと後で教わりました。

思ふことやうやく同じわが愛する
榎櫨の花を妹も愛づらく

妹は妻のこと。勇は、「残夢」の中に妹を数多く登場させています。

妹のため風邪薬買ひとほとほと

往けばいよいよ寒き遠か

妹と二人昨夜の残りの味噌汁を

温めて食む朝がれひかな

自身の伴侶をこのように愛おしく書く詩人はあまりいません。戦後まもない頃、ひもじさに耐え、八幡に夫婦二人、ひっそりと暮らしていたのです。

当時のことを知るYさんにお話を頂きました。

「お風呂どきになりましたら、家で拍子木をパンパンと鳴らしますと、勇さんご夫妻がおいでになって、お風呂に入って行かれました。」

お風呂が沸いたことを知らせるために、拍子木を鳴らすのが、当時小学生の高学年になったYさんの仕事だったようです。

その頃、Yさんのお宅は松花堂庭園内にあったとのこと。そこで拍子木を鳴らせば月夜田の宝青庵まで届くのですから、辺りはよほど閑静な所だったのでしょう。周りは田んぼや畑しかなかったと言います。

宝青庵の座敷の鴨居には、彼の寓居を訪ねてきた客人たちの色紙のお

さまる額が掛かっていました。見れば谷崎潤一郎、志賀直哉などそうそうたる文人たちばかりです。

さすらいの詩人

八幡時代の勇は、閑雅で「隠逸」なる暮らしぶりであつたかもしれませんが、それは彼のそれまでの流離の人生を経て到達した境地だと思われまふ。

老生の域に達した詩人の感慨は、だが、彼の若かりし時代の作風を味わつてこそ理解できるようです。

勇は自らを「戯れ男」と称し、デカダンで遊興の日々を送る時代がありました。一方で、そんな自身を覚めた目で見える感覚も併せ持っています。それが、若き日の勇の歌の魅力の一つです。

かにかくに祇園はこひし寝るときも
枕の下を水のながるる

ゆるやかにだらりの帯のうごく時

はれがましやと君の言う時

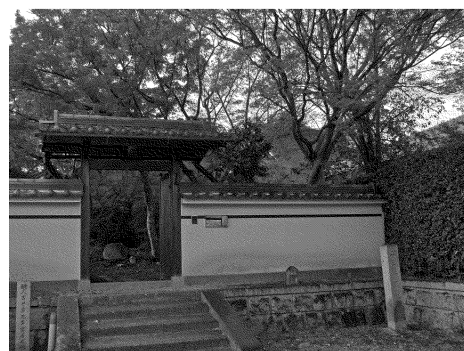
ゆゑ知らず涙ながれぬ聞されし

歌舞練場のまへを過ぐれば

少女言ふこの人なりき酒甕に

凭りて眠るを常なりしひと

—すべて「酒ほがひ」より



写真は、宝青庵
庭園は紅葉でも有名です。



「明星」派の詩人として

風を聴きおもふはすでに亡き

友啄木がありし日のこと

吉井勇のこの歌を読んで意外な気がしました。その境遇があまりにも違い、作風も随分異なる啄木を、勇が友と呼んでいるのです。

石川啄木は、岩手の寒村に生まれ、代用教員や地方記者として貧しい生活を余儀なくされ、やがて社会主義に傾倒し、貧しさに喘ぎながら26歳の若さで亡くなったことで知られます。それに比べ、吉井勇は鹿児島藩士出身の伯爵家の次男として生まれ、明治維新に活躍した名家の子息として遊蕩な日々を過ごす時期があり、70余歳まで生きたのです。

また、二人はともに1886年（明治19）生まれです。奇遇としか言いようがありませんが、共通点は他にもあります。ともに「明星」派の詩人として注目を浴びた時代があり、その中身が違うかもしれないですが、流離の歌人と称されたのです。

身は雲に心は水にまかせよう
旅ゆくわれをとがめたまふな

◆協賛金のご協力をお願いします◆

四国路へわたると云へばいちはやく

道路ごころとなりけるかも

流離は感傷を伴います。啄木は、孤愁と望郷とを歌に託しましたが、勇の感傷には自戒の念と自分を恥じるような息づかいが感じられます。伯爵家に生まれてきたことをうとましく思う気持ちがあるのでしょうか。

紅灯のちまたにゆきてかへらざる
人をまことのわれと思ふや
眠られぬ小夜床さむし人の世の
恥の衾をかつきてぞ寝る

耽美で妖しい感性

だが、勇の真骨頂は、感傷を突っ切ったような耽美であり、儚くも妖しい感性です。それは、竹久夢二の美人画の挿絵が相応しい小世界。

宵闇はふたりのつつみ灯をつつみ
しづかに街のなかをながるる
はかな言云ふ舞姫の手にありて
螢のひかりいよ青しも

そして、勇の耽美は、歌舞伎や市井の寄席情緒に傾斜し、芸人気質や町人文化への憧れが色濃く表れるように

うになります。

島原の角屋の塵はなつかしや

元禄の慶享保の塵

提灯に一時に紅き灯ともれば
棧敷はとみになまめしきかな
しんしんと雪の降る夜の団蔵の
仁木を照らす面あかりかな

団蔵は歌舞伎役者市川団蔵。仁木は、「伽羅先代萩」の舞台で、床下からせりあがる場面で、あかりに両の頬を照らされる敵役、仁木弾正のことです。

一方で、吉井勇は、風を聴けば啄木を思い起こすなど、人懐っこく情に篤い面が見られます。むろん、肉親への思いも強いものがあります。

わがこころいたく傷つきかへり来ぬ
うれしや家に母おはします
吾子は寝ぬわれは眠らで夜を守らむ
この恐ろしき更けがたき夜を

関東大震災の夜、自警団が「不逞鮮人」を取り締まると称してうごめいていました。勇は二歳の吾子を徹夜しながら見守ったのです。
ただし、滋の母、徳子夫人とはや

がて離婚します。

世を棄てむ心おこせど吾予のこと
思へばむげに棄てもかねつつ
われは旅に妻は夜戸出に子はひとり
婢とあそぶあはれなる家

編集後記

第10号をお届けします。今回は、介護と福祉を小特集にしました。介護サービスを提供する側、受ける側に取材し、記事にしました。

また、「文芸路線」に傾斜した感があります。

俳句や短歌、和歌や古典文学、日本人の琴線に触れる文芸が八幡にも息づいていたことに思いを馳せたいものです。

—「きずな」編集委員会—

（郵）00940・8・196292

（銀）京都銀行男山支店

普通預金

4165224

NPO法人22世紀八幡ルネッサンス協会

NPO法人22世紀八幡ルネッサンス協会